

失語症を含め、病気や障害などをもつ人たち、あるいはそういった人たちの家族が集まり、自分たちで運営しているグループをセルフヘルプ・グループ（自助グループ）といいます。失語症患者家族会もそのようなグループの一つです。そのようなグループは、人びとが社会のなかで生きていくために欠くことのできないものです。ときに、“そのような集まりで慰めあってなんになるのだ”といわれることがあります。それは大きな間違いです。そうではなく、そのようなグループは、人が孤立から解放され、生きる力を得る場なのです。人は孤立すると生きる力を失います。しかし、体験や気持ちを正直に語り合い、他の人と情緒・感情的につながることによって、希望を得ることができます。そして、生きる力を得ることができます。また、そのような過程を体験することで、人びとが力を合わせ、勇気を得、グループの外部の人たちともつながり、社会の仕組みや制度を変えていくことも可能になります。

さらに、このようなグループを通して、医療に関する情報を得たり、制度に関する情報を得ることもできます。あるいは、生活のなかでの実体験に根ざした知恵を得ることもできます。このような知恵は、専門職者が提供する知識とは違った価値をもつものです。

失語症患者家族の方がたが、同じような立場に置かれている人たちと出会い、家族会の活動をおこなうことは、このように大切な意味をもちます。それは、人が希望を得、人間らしく生き、社会を変えることを可能にする活動です。

セルフヘルプ・グループが灯台にたとえられることがあります。真っ暗な海のなかにいる人に希望の灯りをとどける存在です。失語症患者家族会がそのような灯台となるよう、心より応援しております。

松田 博幸

(大阪府立大学人間社会学部教員)